

新刊紹介

1. 日本書紀の誕生——編纂と受容の歴史——  
遠藤慶太・河内春人・関根淳・細井浩志編
2. 鎌倉幕府成立期の東国武士団  
金澤正大著
3. 室町幕府の外様衆と奉公衆  
(同成社中世史選書 24)  
木下聡著
4. 戦国大名の土木事業——中世日本の「インフラ」整備——  
(戎光祥中世史論集 6)  
鹿毛敏夫編
5. 「中東」の世界史  
——西洋の衝撃から紛争・テロの時代まで——  
白杵陽著
6. 図説 十字軍  
(ふくろうの本/世界の歴史)  
櫻井康人著

八〇二二〇

遠藤慶太・河内春人・関根淳・細井浩志編  
『日本書紀の誕生』

——編纂と受容の歴史——』

八木書店 二〇一八・四刊

A5 五四四頁 四八〇〇円

本書は、養老四(七二〇)年に編纂された日本書紀の研究ガイドとして、様々な分野・視点から日本書紀を取り上げたものである。日本書紀といえば、日本古代史と思いがちだが、日本書紀は後世にまで影響を与え続けた。古代史のみならず国語学等隣接諸分野の最新研究も含めて一冊にまとめられるのは、これが初めてであろう。

I部「総論—日本書紀研究とは何か—」は、「研究の現在」や「写本」という語を含むタイトルからも明らかなように、日本書紀を読み、研究する前に一読しておきたい基本事項を解説する。日本書紀を学ぶ際、付録と合わせてまず把握すべき内容がまとめられている。

II部「日本書紀の前史」では、日本書紀が編纂される際に参考にしたとされる帝紀や、神功皇后紀などにみられる百済記など

の引用についての研究である。関根淳氏の論考は、天皇記が蘇我系の帝紀であることを明らかにする。遠藤慶太氏は古事記も帝紀の一つであったと論じる。廣瀬憲雄氏の論考はこれまでの百済三書の研究の系譜を知らぬのに有用であろう。

Ⅲ部「日本書紀の成立」は、神代・雄略紀・允恭紀等日本書紀前半部、神話的な内容が叙述される箇所を、どう実証的に読み解くべきかについての論考など。榎村寛之氏は、地域の伝承がどのように日本書紀に反映されたのかを、近年出土した群馬県渋川市の金井東裏遺跡等の発掘成果も取り上げ論じる。細井浩志氏は、記事の日付の分布が月の前半に集中することから、暦日の信頼度について考察する。市大樹氏の論考は、日本書紀の潤色の論理を読み解くために木簡が有用という論であり、納得させられる。笹川尚紀氏は、允恭紀の衣通姫伝説の一部である中臣烏賊津使主伝承が日本書紀編纂時に加えられた部分であると推測する。久禮旦雄氏は、対外的契機が重視されてきた日本書紀編纂の対内的必要性について例示する。

## 新刊紹介

Ⅳ部「日本書紀の受容と展開」は、日本書紀が経てきた中世・近世に関する論考である。長谷部将司氏は、日本古代を通してどのように日本書紀が受け入れられていったのかを概説する。是澤範三氏は、これまでも何度も活字化されている日本書紀がカラー版で写本が刊行されることの意義について、これまでの活字本では拾えなかった朱点や訓（読み）を確認できる等の利点を例を挙げて解説する。昨年、日本書紀熱田本のカラー写本が八木書店から刊行されたが、カラー版を参照する必要性を知るためにも重要な論考だろう。原克昭氏は日本書紀の「解釈の系譜」を紹介し、中世日本紀研究の可能性に言及する。平沢卓也氏の論考は兼右本の筆者である吉田兼右が兼右本を作るまでの経緯を論じる。日本書紀は古代史だけのものではないことが改めて実感される。なお、近世近代については、渡邊卓氏の『日本書紀』受容史研究』（笠間書院、二〇二二）があり、参考になる。

日本書紀は、来年二〇二〇年に編纂一三〇〇年を迎える。その前にぜひ一読されることをお勧めしたい。  
（難波美緒）

金澤正大著

## 『鎌倉幕府成立期の東国武士団』

岩田書院 二〇一八・九刊

A5 四一八頁 九四〇〇円

源頼朝による鎌倉幕府の創立は、必ずしも必然的なものではなく、治承・寿永の内乱の過程における歴史的所産である。この点については、列島各地に独立政権構想が存在し、内乱が「貴種たちのトーナメントゲーム」であったという指摘（入間田宣夫『中世武士団の自己認識』三弥井書店、一九九八年）や川合康氏の一連の成果（『鎌倉幕府成立史の研究』校倉書房、二〇〇四年など）もあり、すでに共有された認識であると考えられる。

さて、本書は、この「トーナメントゲーム」における頼朝のライバルたちを照射したものであり、貴重な論考が収録されている。以下、章立てに沿って内容を簡単に紹介したい。

第一章「甲斐源氏」は、付論を含めて四本の論考を収めている。本章では、甲斐源氏の挙兵は頼朝のそれと無関係であり、独

自的・自立的に行われたこと、『吾妻鏡』養和元年(一一八一)三月七日条に見える武田信義の頼朝への臣従記事には作為があり、実際より早く記述されていること、一条忠頼の謀殺の背景には関東御分国の成立が関係していることなどについて論じる。

第二章「信濃源氏」は、三本の論考を収めている。本章では、治承五年(一一八二)六月の横田河原合戦の検討から、北陸道方面の反平氏勢力には木曾義仲だけではなく「佐久党」の信濃源氏や甲斐源氏との連携関係が存在したこと、その信濃源氏と甲斐源氏の連携関係が崩れるとともに、頼朝勢力との対立と和睦によって北陸道方面から上洛し、唯一の武家棟梁の座を目指したこと、上洛後の伊予守遷任についてメリットや先例・故実の点から意義があったことなどについて論じる。

第三章「源範頼」は、三本の論考を収めている。本章では、九州における範頼の軍事行動や占領地支配、源義経との対立などの検討から、範頼が必ずしも無能な指揮官ではなく、むしろ頼朝に忠実な代官であったことを論じる。また、範頼の三河守への

補任の理由について、三河国が関東御分国だったからではなく、範頼を支援していた安田義定(甲斐源氏)による三河侵攻と実効支配を掣肘するためであったことを論じる。

第四章「諸源氏と門葉」は、四本の論考を収めている。本章では、義仲の入京後に行われた勳賞(任国守)、義仲と連携関係にあった近江源氏、佐竹氏が頼朝に従属するまでの過程などに関する個別的な検討や、奥州合戦における幕府軍の構成について『吾妻鏡』文治五年(一一八九)七月一九日条に記載された交名をもとにした考察がなされている。

付章「武威武士足立氏」は、六本の論考を収めている。本章では、足立氏の系譜復原や安達氏との関係、「宿老」としての足立遠元の位置づけ、その後の足立氏の消長、武威国足立郡に所在した武士たちなどについて検討している。

やや羅列的になってしまったが、以上、内容を紹介してきた。なお、本書では地名や人名が多く登場する一方で、索引がないために読者にとってはやや不便である。ま

た、先行研究の整理やそれに対する著者自身の立場の表明が必ずしも充分に行われていない。したがって、冒頭の「前言」で述べられている「基幹的論旨」(頁)が指し示す内容の理解については、読者に委ねられている。

ただし、それらの点は瑣末な問題に過ぎず、頼朝権力の相対化について意欲的に試みたところに意義を有する。本書によって、鎌倉幕府成立史の発展に多大な影響があるのは間違いない。ぜひ一読をお勧めする。

(工藤祐一)

木下聡著

『室町幕府の外様衆と奉公衆』

(同成社中世史選書 24)

同成社 二〇一八・四刊

A5 三七〇頁 八〇〇〇円

本書は、前者『中世武家官位の研究』(吉川弘文館、二〇一一)に続く著者二冊目の論文集である。室町幕府の直臣団のうち、外様衆・奉公衆を論じた第一部と、評定衆

を論じた第一部からなる。

第一部第一章「室町幕府の秩序編成と武家社会」は二〇一四年度歴史学研究会大会報告をもとにしており、本書の総論的位置にある。室町幕府の儀礼的秩序の展開過程を、支配体制と関連させつつ論じている。

初出論文に無かった注が追加されており、特に川岡勉氏の「室町幕府―守護体制」論に対する批判は注目される。第二章「室町幕府外様衆の基礎的研究」は、これまで基礎的な研究の少なかった外様衆について検討したものの。構成員を個別に検討した上で、内裏門役との関係から外様衆の語源を説明している。第三章「室町幕府奉公衆の成立と変遷」は五番衆の成立と変遷を検討したものの。奉公衆は「永和末〜永徳頃に骨子ができ」、「応永十年代までに、後の番帳のような形になったと推測される」とし、戦国期以後も縮小再編成を経ながら存続したとする（一五三頁）。なお第二章・第三章には外様衆・奉公衆の一覧表が付されており、詳細な索引とあわせて便利である。

第二部は、摂津氏・二階堂氏・町野氏・太田氏、波多野氏の個別研究を収録する。

## 新刊紹介

これらの諸氏は、鎌倉期の研究では豊富な蓄積を有するが、室町〜戦国期については不明な点も多かった。著者は関連史料を博搜し、將軍や大名との関係にも言及しながら、各氏の系譜や動向を丁寧に跡づけている。また、第一部は室町幕府を対象としているが、第二部は鎌倉府・古河公方のもとの活動も論じられている。室町幕府と鎌倉府の双方で研究を牽引する著者ならではの内容といえよう。なお近年、戦国期の京都二階堂氏による丹後国御料所支配に関係するものを含む「津母八坂神社棟札類」が、京都府の指定文化財となつていて、これを付け加えておく（『京都府の文化財』三五、二〇一八、解説執筆者伊藤太氏の御教示による）。

一八、解説執筆者伊藤太氏の御教示による。  
前者に引き続き、著者による史料の博搜は驚異的である。それに基づいて、室町幕府・鎌倉府の直臣団の基礎的な研究水準を大きく引き上げた点に、本書の意義がある。ただし、本書の内容はそれだけにとどまらない。第一部第一章は、家格や職制から室町幕府の秩序編成を論じた研究の、現時点での到達点といえる。また第二章・第三章は外様衆の語義や奉公衆の成立時期について

て新説を提示しており、議論を呼ぶだろう。第二部の各章も、特に戦国期の政治史・権力論にとって興味深い指摘を多く含んでいる。

近年、室町幕府・鎌倉府の研究は活況を呈しているが、なお未解明な部分は少なくない。本書の成果を受けた、さらなる議論の展開を期待したい。（川口成人）

鹿毛敏夫編

『戦国大名の土木事業——中世日本の

「インフラ」整備——』

（戎光祥中世史論集 6）

戎光祥出版 二〇一八・六刊  
A5 二七七頁 三八〇〇円

中世社会における「インフラ」整備に着目した本書は、戦国大名や国人領主による大規模土木事業の事例を広く紹介し、その政策的特徴や社会全体への影響を論じている。残存する文献史料が少ないテーマであるだけに、中世考古学の結果との突き合せが重視されており、学際的な共同研究

の成果でもある。

ここでの「インフラ」は都市・軍事施設・港湾などを指し、その整備は、軍事的性格を帯びた事業と、産業・生活基盤を対象とした公共性の高い事業とに大別される。

従来、戦国期における土木事業の研究といえば、前者を検討するものが大半であったが、「決して戦争と破壊に明け暮れたわけではない戦国時代日本の『土木』と『インフラ』の実体相」の解明をめざし、後者にも焦点を当てた点に本書の独自性がある。

三部からなり、それぞれ四本の論文ないしコラムを配し、合わせて十二人による十二本の論考を収めている。

第一部「戦国大名・国人領主の土木政策と城郭」では、吉川氏（安芸）・大友氏（豊後府内）・島津家臣上井氏（日向宮崎）・豊臣期小早川氏（伊予）による城郭・道路の造営や整備の状況について検討する。

第二部「中世の都市設計」では、周防山口・肥後八代・筑前博多・石見益田という四つの中世都市について、設計と開発・整備を検討し、都市空間の中世的特質にも触れる。領主の居館周辺だけでなく、寺院の

配置や門前町も検討対象にしている。

第三部「中・近世の社会基盤整備」では、検討時期を前後にのびして戦国期の特性の解明を企図する。平安期以来の生活における水に対する意識のあり方、豊臣期長宗我部氏による海事法制の整備、貿易港博多・平戸・長崎の社会基盤整備などが考察される。最後に、编者自身が大友氏の治水・灌漑事業を検討し、戦国大名の事業を豊臣期および近世における公共性の高いインフラ整備事業の先駆けと位置づける。同時に戦国大名の夫役の動員論理と豊臣期のそれとの間に大きな質的相違を認め、戦国大名の事業の限界を見据える。これは、本書の総論とみてもよいだろう。

多数の戦国大名の「インフラ」整備が取り上げられているだけに、各論考を比較しながら読むことで、土木事業の実態だけでなく、各領主の特質、さらには地域間の相違点もみえてくる。「インフラ」の問題は、人や地域を考えるためにも有効である。

ただし、戦国大名といえながら、考察の対象は九州・中国・四国のそれに限られている。甲斐武田氏の事例が知られることに

触れ、全国的な比較検討を今後の課題としてあげてはいるが（二六二頁）、西日本を対象とすることの積極的意義の明文化が欲しいところである。

いずれにせよ、本書は戦国時代日本のあまり注目されてこなかった側面を実証的に描き出すことに成功しており、今後の学際的研究における一つの指標となるものと考えられる。たとえば、近世における土木事業といえ、公儀の城普請や川普請など、大規模事業が着目される傾向にある。しかし、本書を踏まえれば、近世においても大規模事業だけでなく、同時並行して地域の「インフラ」整備が中世以来続けられていた点に留意すべきだと気づかされる。戦国大名に関心を持つ方に限らず、広く一読をお勧めしたい。

（川路祥隆）

白杵陽著

## 『「中東」の世界史』

——西洋の衝撃から紛争・テロの時代まで——

作品社 二〇一八・八月

B6 三二七頁 二六〇〇円

「中東」とはどこを指すか。方位の定まった平面の地図上でならまだしも、球体である地球規模 (Global) で考える際、この地域概念が孕む問題はより際立つだろう。この古くて新しい問いに対し、現代の日本人研究者の視点から、近現代の「中東」をめぐる政治史を紐解き、対話を試みるのが本書である。

第一章「中東」の歴史を考えるためには、本書における「中東」の地域概念をめぐる前提が示される。具体的には、「中東」地域がいかに周辺諸地域と密接な関係を歴史的に有してきたかが述べられ、特に十九世紀における「東方問題」が現代に連なる「中東」概念の創出に果たした役割が強調される。第二章以降は、第一章で示された前提に沿って、時系列に近現代「中

東」の政治史を整理する。第二章「近代ヨーロッパとの遭遇」は、ナポレオンのエジプト遠征に始まる「西欧の衝撃」を前にしたオスマン朝やエジプトにおける自己改革を、第三章「植民地化への抵抗運動」は、十九世紀のエジプトやアルジェリアでの反植民地抵抗運動を重点的に扱う。第四章「帝国主義とナシヨナリズム」では、十九世紀末の交通・情報の技術革新を背景とする帝国主義の拡大を「中東」における展開から論じ、第五章「第一次世界大戦とオスマン帝国の崩壊」では、オスマン領の分割が記述される。その後の「中東」における英仏による委任統治と同時期の民族資本家や共産主義勢力などの新たな反帝国主義勢力の台頭については、第六章「両大戦間期の委任統治」が、続く第七章「第二次世界大戦後のアラブ冷戦」は、米ソ冷戦下のアラブ諸国独自の冷戦構造、そして第八章「イスラーム復興と米ソ冷戦後の世界」は、「イスラーム・イスラーム革命以降の様々な「イスラーム主義」の興隆・復権と、ポスト冷戦」さらには今日のポスト・アメリカ時代の「中東」地域を取り巻く国際政治の激変

が綴られる。以上の第二章以降の記述からは、本書における「中東」が、概ね旧オスマン領、特にエジプト、パレスチナ (イスラエル)、ヨルダン、レバノン、シリア、イラクなどのアラブ諸国を中心とすることが明白である。著者自身「あとがき」で明かすように、本書の歴史記述の多くが、A・ホーラーニーやE・ローガンなどのいわゆるアラブ史研究者の著作に依拠することにもよるのだろうが、「中東」とアラブ諸国が同義か否かは、同地域の歴史の重層性に鑑みてもいささか疑問が残る。近現代の構築物たる「中東」という地域概念を通時的に用いることの有効性は今後大いに問われるべきだろう。

本書の特長の一つは、日本と「中東」の近現代史の交叉を、各時代の日本の知識人や政治家の経験から抽出しようとする試みにある。具体的には、谷干城や東海散士、幸徳秋水、橋本欣五郎、芦田均、柳田國男、上原専祿らを登場させ、通常「中東」との関わりで触れられることの少ないこれらの人物たちの意外な一面を明らかにする。他方、ナポレオンのエジプト遠征を「近代」

の起点とする点や、オスマン朝下の社会をモザイク社会と規定する点など、近年の歴史学界の動向を踏まえると議論の余地のある見解の踏襲も散見される。また著者は、グローバル・ヒストリーの興隆も意識しつつ、敢えて世界史という語を使用したとしているが、著者の学識をもってすれば、この点についても近年の日本の歴史研究における動向と絡めながら、もう少し論及できただけではなからうか。

とはいえ「中東」諸国の政治史という、ともすると敬遠してしまいがちな主題を扱いつつ、本文全体を通じて柔らかな筆致で叙述がすすめられる本書は、近現代の「中東」の政治史に関心を寄せる幅広い読者層に向けた良質の入門書と言えよう。

(田中雅人)

櫻井康人著

『図説 十字軍』

(ふくろうの本／世界の歴史)

河出書房新社 二〇一九・二刊  
A5変 一四〇頁 二二〇〇円

「十字軍」という言葉を聞いて何を思い浮かべるだろうか。多くの人は、一〇九六年にエルサレム奪還を目指して出発したいわゆる第一回十字軍に始まり、その後数回に亘り実行された一連の対イスラーム遠征を第一に想起するだろう。高校世界史程度の知識がある人なら、さらにアルビジョワ十字軍や少年十字軍、北方十字軍といった術語を挙げることが出来るかもしれない。しかし、いずれにせよそれを中世特有の現象と認識している人が多いのではなからうか。本書はこのような理解に対し、十字軍とはナポレオンの時代に至るまで無数に展開された軍事運動である、とする最新の学術的定義に則り、その全貌を通時的に概観するものである。

本論は三部から成り、各部分がさらに時代とトピックに沿って章以下に細分化されて

いる。第一部「クレルモン教会会議への道のり」では、「マホメットなくしてシャルルマーニュなし」という言辭に象徴される「ビレンヌ・テーゼ」の概要とそれに対する研究史の批判を紹介した後、十字軍の提唱に至る過程として、ビザンツ皇帝アレクシオス一世による救援要請から聖戦理念と「キリストの騎士」の誕生までを見渡す。

第二部「盛期十字軍の時代」では、クレルモン教会会議と第一回十字軍の出発に始まり、エルサレム王国の成立と盛衰、そして十三世紀における一連の遠征と十字軍国家の滅亡に至る道程を辿る。第三部「後期十字軍の時代」では、その後の三大騎士修道会の動向やオスマン帝国の勃興に伴うヨーロッパ世界の混乱、そして十字軍の終焉を通観する。最後にエピソードとして、近世から近代にかけて醸成された盛期十字軍を「過去化」する風潮や、十字軍観の変化等を簡潔に論じる。

おなじみ河出書房新社「ふくろうの本」叢書に収められた本書の特色は、何よりもその色鮮やかさである。殊に歴史書というジャンルにあって、さながら装飾写本のように

うにページ全体を埋め尽くすほどの豊富な写真と図像とによって彩られた本書は、文字通り目を引く存在と評されよう。大小様々な視覚資料の合間を縫うように配置された限られた紙幅で七〇〇年以上に及ぶ十字軍の通史を網羅することの難しさは容易に想像しうるが、著者の櫻井康人氏は、学術書としての専門性を保ちながらもそれを非常に平易明快な語りを以て可能たらしめている。国内外の基本研究を過不足なく押さえた巻末の参考文献表に加え、年表と十字軍国家支配者一覧表、およびコラムに含

まれる二枚の家系図は、座右の手軽なレファレンスとして読者のあらゆる基本的な問いに答える。

以上から窺える通り、また著者自身が「あとがき」で述べる通り、本書は特に初学者を読者に見据えた十字軍の入門書と位置付けられる。同氏は近年、本邦における関連文献の数が伸び悩みつつあることを指摘する一方で、次のように激励した。「現状においては国外でも十字軍研究はまだまだ過渡期におかれており……従ってその世界に飛び込むハードルも決して高くないの

である。」(「十字軍研究動向」『西洋中世研究』第九号、二〇一七年、一六二頁)。この言葉が騎士と民衆を駆り立てたかの演説になぞらえられようとすれば、このたび上梓された本書は、まさにこれから十字軍史という巡礼路に足を踏み入れようとする人々のための頼もしい道標と言えよう。勿論、既に学界に身を置く西洋中世史家にとっても、最新の研究に裏打ちされた本書の内容は目新しく映るものに違いない。予備知識の如何にかかわらず、十字軍に関心を寄せる人が須く手に取るべき一冊である。(佐野大起)